様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科研費
KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：１７４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０００１２

研究課題名（和文）専門職の倫理的熟達性に関する研究

研究課題名（英文）A study on ethical expertise of professionals

研究代表者
田中　朋弘（Tanaka, Tomohiro）

熊本大学・大学院人文社会科学研究部（文）・教授

研究者番号：９０２９５２８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：「専門職における倫理的熟達性とは何か」という問いについて考えるために、本研究では徳と技能の類比論を取りあげた。「徳は技能であるか」という問いに対してジュリア・アナスは、徳は技能と似ているが技能ではないと考える。他方、マット・スティクターは、徳は技能であると考えている。両者を最も隔てるポイントは、アナスが徳は性格特性であると見なし、他方スティクターが徳は性格特性ではないと見なしている点にある。他方で、両者は共に「技能は性格特性ではない」と考えている。彼らの議論はそれぞれの側で整合性は保たれているが、徳が性格特性であるか否かについて明示的に論証されているわけではないため、議論の余地が残る。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「専門職における倫理的熟達性とは何か」という問いについて考えるために、本研究では徳と技能の類比論を検討した。古代ギリシア以来、徳と技能の発達段階に関して類比性が認められてきたが、近現代の規範倫理学では、道徳的判断の構造分析に力点が置かれ、倫理的熟達性に関する議論は等閑視されてきた傾向がある。本研究では、徳と技能の類比論について論じている新しい研究を踏まえて、それらが実践においてどのように考えられるべきかについて、一定の手がかりを得られた点に学術的意義がある。またそれを踏まえて、専門職倫理の実践において、徳や技能をどのように考えるべきかを解明するための手がかりが得られた点に社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：In order to consider the question, "What is ethical expertise in the profession?" this study took up the analogy between virtue and skill. Julia Annas considers that virtue is like skill but is not skill. Matt Stichter, on the other hand, believes that virtue is a skill. The point that separates them most is that Annas sees virtue as a character trait, while Stichter sees virtue as not a character trait. On the other hand, they both believe that skill is not a character trait. Although their arguments are consistent on each side, they are not explicitly arguing the reason whether or not virtue is a character trait, which leaves room for debate.

研究分野：人文学

キーワード：倫理的熟達性　徳　技能　専門職　性格特性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

　これまでに筆者は、研究代表者として、(1)「専門職倫理の道徳的基礎づけに関する研究」基盤研究(C) 2005-2007 年（課題番号 17520020）、(2) 「専門職におけるケアの倫理の研究」基盤研究(C)2015 年 - 2018 年（課題番号 15K02006）、研究分担者として、「医療専門職の「組織化された自律」の構造と変容の社会学的研究」(研究代表者・中川輝彦) 基盤研究(C) 2017 年- 2021 年などで、専門職倫理の研究に従事してきた。そして、一連の研究の中で新たに浮かび上がってきたのは以下の問いである。すなわち、一般に専門職の技能には程度の差があると見なされるが、卓越した専門職はしばしば道徳的にも優れていると見なされる。そうした場合、そもそも専門職が倫理的に熟達するというのは何を意味するのか、またどのようにしてそうなるのかという問いである。

２．研究の目的

　本研究では、「専門職における倫理的熟達性とは何か」を明らかにすることである。規範倫理学の諸理論を概観すると、義務論や帰結主義においては、人が道徳性をどのようにして身につけるのかということよりも、道徳性の本性を探る議論に強い関心が向けられていた。他方徳倫理学では従来、徳と技能の類比論が論じられてきた。こうした文脈を踏まえて、(1)徳倫理学における徳と技能（およびその熟達性の類比論）を検討する。それらは大別すると、プラトン的な徳と技能の考え方と、アリストテレス的な徳と技能の考え方に分けられている。本研究は、こうした徳と技能（およびその熟達性）に関する考察を踏まえ、それらに一定の評価を加えながら、同時に (2)「倫理一般」の観点から倫理的熟達性について考察することを目指す。さらにそれらを踏まえて、(3)「専門職の倫理的熟達性とは何か」について多元的な観点から明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

「専門職における倫理的熟達性とは何か」という基本的な問いに答えるために、本研究は以下の段階を踏まえて検討を進める 。(1)徳と技能の類比論の検討。この問題の代表的な論者であるジュリア・アナスと、マット・スティクターの議論をそれぞれ検討する。具体的には(Annas　1995)から議論を初め、それに応答した(Stichter 2007)という二つの論文を検討する。さらに、それらを踏まえて展開された(Annas　2011)および(Stichter 2018)を検討する。(2)倫理的熟達性一般および(3)専門職の倫理的熟達性に関する考察。(1)での検討を踏まえて、徳倫理学に限定せず倫理的熟達性一般についての検討を行い、それらが専門職においてどのように実現されるかを探る。

４．研究成果

[令和 2 年度]　初年度の本年度は、徳倫理学における徳と技能(skill)（およびその熟達性[expertise]）の類比論から議論を始めた。具体的にはまず、ジュリア・アナス(Annas 1995)「技能としての徳」によるプラトン的な徳の熟達性をとりあげサーベイを行い、以下の点が明らかになった。アナスによれば、従来、徳と技能の類似性についてはそれほど詳細に論じられることはなかった。その一因としては、徳倫理学において強い影響力を持つアリストテレスが、徳と技能は異なると主張していることが挙げられ

る。しかし、プラトンやストア派の学者たちは、必ずしもアリストテレスと同じ意見ではなく、むしろ、徳は技能である、または、徳は技能と類似していると主張している。そして技能は単なるカンやコツにとどまらず、知性的な部分を持つと考えられている。アナスは、技能としての徳には、1)教示可能性、2)徳のある行動に関する判断を統一するもの、3)理由に基づく行為の正当化、といった要件が必要であるとみなす。これらの要件は、徳が知性を必要とするという解釈に基づくことになる。こうした観点からみて、アナスは、アリストテレスよりもむしろプラトン－ソクラテス的技能観の方が、徳をうまく説明できると考えている。徳倫理学に限定しないとしても、この三つの要素は、現代の規範倫理学理論において求められる規範的な要件と重なりあっていると言える。アナスはこうした解釈をその後(Annas 2003)も基本的には維持しているが、比較的新しい文献では、基本的な路線は維持しながらも、プラトンとアリストテレスの立場の違いを強調することを少し弱めている(Annas 2011)。

[令和３年度] 二年目となる本年度は、アナスの解釈に対していくつかの疑問を投げかけたスティクター(Stichter, M.) の議論「倫理的熟達性－徳の技能モデル」(Stichter 2007)を取り上げて、そのアナス批判が妥当であるかを検討した。またその際特に、技能について両者がどのような観点から論じているかということに着目した。アナスはプラトンに倣って、徳と技能に共通するのは、(1)教示可能性、(2)統一性、(3)説明可能性という三つの要素と見なしており、両者が持つ知的構造を重要視している。こうした徳と技能の知性主義的モデルに対して、スティクターはアリストテレスやイソクラテスを支持し、徳や技能が経験主義的なモデルとして考えられるべきではないかと主張している。これらの検討から分かったことは、1) アナスもスティクターも、徳と技能の類似性をある程度認めており、それらがコツ（knack）と異なるという点では一致していること、2) 両者ともに、技能とコツの違いについては認めるが、技能とコツの関係性については詳しく論じていないこと、3) 一見してそう考えられるほど、技能とコツの関係は単純に相反するものではないこと、４）技能とコツの関係を踏まえると、技能と似ているとみなされる徳についても、経験や直観に基づくとされるコツの観点からの検討も必要になるのではないかということ、以上である。

[令和４年度]　三年目となる本年度は、アナス『徳は知なり: 幸福に生きるための倫理学』(Annas 2011）における徳に関する「技能からの類推」概念の検討を中心に行った。そこで以下の事柄が明らかになった。アナスは、(Annas 1995)ではプラトン＝ソクラテス的な徳の知性モデルを支持し、アリストテレス的な徳の経験モデルを支持していなかったが、(Annas 2011)ではプラトン＝ソクラテス的な説明は少なくなり、かなりの程度アリストテレスに依拠している。また、(Annas 1995)では、技能と徳には合理的な説明可能性が必要だと考えており、それはソクラテス的なモデルであった。それゆえこの解釈に従うと、技能や徳に関して、理由が説明できない状況をうまくカバーできないという問題が生じた。それを（Annas 2011）は、徳の「自己秘匿性」概念で説明した。この概念の導入によって、自分の行為を説明できない有徳な人の存在も説明できるようになる。さらに (Annas 1995)では、一方では本物の技能には、初心者と熟達者という

違いがあると説明されており、他方では、技能には統一的把握が必要で、それがなければ全く技能がないのと同じだというソクラテス的な解釈が採用されていた。だが(Annas 2011)では、徳と技能の統一性について、徳は統一性を必要とするが、技能には統一性を必要としないものもあるとして、徳と技能の類比性を統一性解釈においては弱めている。そして、徳が相互に連関し、統一性を持つという議論に関して、アナスは、一貫して支持する立場をとっている。そこで、(Annas 2011) における徳の統一性解釈を支える概念装置は、その「フィルター性」である。アナスは、徳と似てはいるが徳ではないものとを見極めるためのフィルターとして、枢要徳の相互関係性を理解している。

[令和５年度]（研究期間を１年間延長した）　四年目である本年度は、スティクターの『徳の熟達性-道徳的・認識的生の改善』(Stichter 2018)を中心に検討した。スティクターによれば、徳は技能と似ているのではなく、「徳は技能である」。そして、技能を習得することが、基本的には、高度に複雑な領域で望ましい目標を達成するために行う、洗練された自己調整の一形態であると考えられる。道徳的な行動とは、基本的に具体的な道徳的基準を参照して自己調整することである。徳を身につけるためには一般的な技能の習得に含まれるのと同じものが必要である。つまり、徳とは技能であり、道徳的な価値を巡って自己調整するための参照点だということになる。

　徳と技能は似ているが、前者では動機付けが重視され、後者では必ずしもそうではない技能もあることから、それらは同一ではないという主張に対して、スティクターは、動機に基づく反論が「技能としての徳」という考え方を棄損しないと主張する。技能の中には、徳と同じように活動それ自体に価値があると見なされ、高度な技能の発揮に伴うフロー体験やそれに伴うよろこびが、技能においても動機となりうる。

　スティクターは、徳と技能が異なる点として、徳には、よい人生という目的全体の中で様々な行為がどのように位置づけられるのかについて考えるために、実践的知恵が必要であると見なす。端的に言えば、徳は技能であるが実践的な知恵を必要とし、他方で技能の中には、実践的な知恵を必要としないものもある。

　さらに最終年度としての本年度は、アナス(Annas 2011)とスティクター(Stichter 2018)の議論を比較検討し、両者の議論における合意点と相違点を確認した上で、徳と技能の関係をどのように考えるべきなのかを探った。「徳は技能であるか」という問いに対してアナスは、徳は技能と似ているが技能ではないと考える。他方、スティクターは、徳は技能であると考えている。教示可能性または学習可能性、徳の統一性、説明可能性という論点に関しては、議論が進むにつれて、両者の間にそれほど大きな差異はなくなってきているように見える。さらに、徳には実践的な知恵（フロネーシス）が必要であるという点、また実践的な知恵それ自体は技能ではないという点でも両者は同じ意見である（ただしアナスは実践的な知恵を徳の一つと見なし、スティクターはそれを徳ではないと見なしている)。

　両者を最も隔てるポイントは、徳が性格特性であるか否かという点にある。アナスは、徳は性格特性であると見なし、他方スティクターは、徳は性格特性ではないと見なしている。アナスの立場からすれば、スティクターの議論は、徳ではなく自制心(エンクラテイ

ア)についての議論であると見なすであろう。そうすると徳は技能であるか否かという問いは、徳は性格特性であるか否かという問いに接続することになる。残念ながらスティクターは、(Stichter　2018)では、アナスが(Annas 2011)で何度か説明している徳と自制心の区別について、全く言及していない。

　他方で、両者ともに自覚的に論じていないように見えるが、アナスとスティクターの議論が一致している点がある。それは、両者が共に「技能は性格特性ではない」と考えていることである。この点を共有しているからこそ、アナスは徳を技能ではなく性格特性であると考え、スティクターは、徳は技能であるが性格特性ではないと考えたことになる。ただしスティクターは、徳は性格特性ではないと明言しているが、では何であるかという点についてはあまり明確に説明していない。彼の議論の全体を踏まえて言えば、徳は技能であり自己調整能力である、つまり行為者の性格に関する特性ではなく、行為に関する特性である、ということになる。

　本研究では、徳は技能を含むという観点、徳の極大概念と法定概念という観点を取り入れることで、徳と技能をめぐる議論を解きほぐす方向性を探った。それらはまだ十分とは言えないが、性格特性としての徳について考える場合、スティクターによる徳の技能モデルに基づく「性格特性ではない徳」がアナスのいう「性格特性としての徳」に展開する可能性、およびそれがどのようになされうるかを検討することが今後の課題となる。さらにそのためには、性格特性としての徳と感情がどのように結びつき、習慣的に形成されるのかという問題も検討される余地があることが確認された。

[研究全体について]

　専門職における倫理的熟達性について考察するために、徳と技能の関係について検討してきたが、コロナの影響が二年以上に及んだため予定通り研究が進められず、研究期間を1年間延長した。それでもなお、当初の目論見よりも問題が複雑であることが判明したこともあり、最初に掲げた課題のうち、(2)倫理的熟達性一般および(3)専門職の倫理的熟達性に関する具体的な考察についてまでは詳しく明らかにすることはできなかった。しかし、それらの考察のために必要な、倫理性（徳）と技能の関係に関して、海外における新しい研究をベースにした基礎的な検討を一定程度実現できた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 田中朋弘	４．巻 3
２．論文標題 [研究ノート]「徳・技能・コツ－予備的考察－」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『人文科学論叢』熊本大学大学院人文社会科学研究部	６．最初と最後の頁 141-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 田中朋弘	４．巻 18
２．論文標題 徳と技能について	５．発行年 2024年
３．雑誌名 『先端倫理研究』（熊本大学倫理学研究室紀要）	６．最初と最後の頁 22-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関